

## 「物語の力」

青木幸子

「先生になりたい」輝く眼差しで私をみつめる学生たちに、私が語った、これは「小さな物語」である。

### 一面の菜の花

春、学園内を彩る菜の花を見るたび、思い浮かぶ光景がある。それは山口県萩高校に新任教師として赴任した七月梅雨明けの出来事だ。

三木清「人生論ノート～旅について～」を始めるにあたり、私はこう語り始めた。「みんなは「旅」って聞いて、どんなこと思い浮かべる?」「はい、はい」と、元気のいい生徒たちが手を挙げ、そこを起点に「旅」をめぐる「私の物語」の語りが始まった。旅の思い出、憧れの旅、語りのリレーを受け、金子君が立ち上がる。「何もあります」と怒ったように言って、金子君はドンと座った。クラス中がざわつく。「あのね、どんなことでもいいの。旅って聞いて、金子君の中に浮かぶことだったらなんでも」「だから、何もあります」。険しい顔つきでにらみつけ、鋭い口調ではねかえす金子君、私はものすごく動揺した。数日間の不眠状態も相まって、目の前の風景がおかしくなった。教室の床がぐわーんとせりあがり、目の前が暗くなった。「先生、先生、大丈夫?」。ざわざわしているうちにチャイムが鳴った。その後、保健室で横になりなんとか体調はもどった。ただ、金子君のあの険しい顔が胸の中でずっと疼いた。何がいけなかったのだろう。旅というテーマが悪かったのか…。

その日の放課後、私は一人、図書館司書室でぼんやりしていた。「先生、大丈夫?」。振り向くと、入口に金子君が立っていた。メガネの下から、泣き出しそうな表情が見える。「ごめんね金子君、心配かけて」「俺が、変な言い方したけえ、ごめんね先生」「ちがうよ、金子君のせいじゃな

いよ。私、しつこく聞いてごめん」「ちがう、俺、先生に怒ったんじゃないよ。つい、先生にぶつけてしまった。俺、みんなの話聞きよったら、急にいろんなこと思い出して。先生、俺の父さん、今、失踪中なそ。どこにおらんか、生きてらんか、死んだらんか、それもわからん。中学のとき、父さんの建設会社が倒産して、銀行に相談行ってくる言うて、そのまま、父さんおらんくなった。俺が中学三年のとき。じゃけ、今、母さんが働いて、じいちゃんに俺ら世話になっちゃう。今日ね、旅の話聞きよったらね、父さんがおらんようになる前行った、最後の、家族旅行のこと、急に思い出してしもうて。あれ、どこやったのかな。母さんが朝早くからおにぎりやら卵焼きやらいっぱい作って、魔法瓶に熱いお茶をいっぱい入れて、俺と妹と父さん母さんとで出かけたそ。菜の花がいっぱい咲いとった。田んぼの中に小さい水車があって、妹が「水車見たい見たい」言うんで車停めて、みんなで見に行ったんよ。小さいけど、水を一生懸命はじいて、ゴトゴト音たてて回りよった。ここで弁当食べよって、新聞紙ひいて。父さんが資金ぐりで走り回りよったけえ、みんなで一緒にご飯食べるん久しぶりで、俺、ぶち、うれしかった。「うまいのぉ、母さんの卵焼きは最高じゃ」。そう言うて食べよった父さんが、「イサオは将来なんになりたいんか?」っていきなり聞くけえ、俺、びっくりして、「まだわからん」言うたら、「そうやのぉ、まだ中学生やけえの。でも、なりたいうちゅうものができたら、がんばって挑戦せえよ」って。今まで、そんなこと言うたことがないけえ、俺も父さんに聞いたそ。「父さんは何になりたかったん?」って。そしてたらね、父さんが「俺は、本当は電車の運転手になりたかった。あそこに走りよる電車みたいにちいちゃい電車に乗って、こんな菜の花の中をのんびり走る、電車の運転手に

---

なりたかった」。父さんの運転する電車に乗って、水車やら菜の花やらをながめてみたかった。そんなことを急に思い出したら、哀しいやら、悔しいやら、もう、わけわからなくなって、それで、先生にあんなふうに言うてしもうた。ごめんね、先生」。

菜の花を見るたび、私は思い出す。背筋をまっすぐにのびして、静かに廊下を歩いていった彼の後姿を。菜の花、水車、そして小さな電車、あの幸せな時間の中に二度ともどれない家族の物語を。

### 三つ編みの少女

新入生と行う「教職概論」の授業が私はとても好きだ。「今まで授業は静かに聞くものと思っていたので、ガンガン話し合おうねって言われ、最初びっくりした。でも、真剣に話し合うと驚くくらい良いアイデアって生まれるなって、二度びっくりした」等、率直なコメントを書いてくれる学生にワクワクする。そんなある日、一人の学生がいつもとちがう三つ編みスタイルで授業にやってきた。その三つ編みを見た途端、私は明子さんのことを思い出した。

山口県最後の赴任校、宇部高で出会った明子さんは毎日図書館にやってきた。きっちり編んだ三つ編み、きゅっと閉じた唇、一部の隙もない感じがちょっと痛々しいくらいまじめな生徒だった。

あれは珍しく山口に雪が降った二月のことだった。「国語総合」で村上春樹の「青が消える」に挑戦した。僕の大好きな「青」が突然目の前から消える村上ワールドに生徒たちはダイブする。初めて読んだ感想を語り合うとき、明子さんはこう言った。「わけのわからない話ってみんなは言いましたが、私はものすごく哀しい気分が伝わってきて、せつなかったです」。

それから数日後、放課後の図書当番で一緒になった明子さんが小さな声で語り始めた。「先生、私、青が消える、ものすごく好きです。いきなり消えるっていう哀しさが、あの主人公のどうしようもない辛さが、なんだかわかる気がするから。私、幼稚園のときお母さんが死んで、ずっとお父さんと二人で暮らしてきたんですけど、私、一番イヤなのが、お父さん、お酒が入るたびにお母さんのことを思

い出して泣くことなんです。いくら泣いても帰ってこないのに。どうしてお父さんは、いつまでも忘れられないんだろうって…。で、私、そう思う自分のことを冷たい人間になって、すごく嫌いだったんです。でも、青が消えるを読みながら、私、なんか、いろいろ考えるようになりました。私ひょっとして、自分の哀しさを凍らせて、なかったことにして、思い出すまいと必死になってたのかなって…。私が泣いたら、お父さんがますます哀しむ。明子がかawaiiそうだってお父さんが思うのが哀しいから、無理やり強がってたのかなって…。青が消えて、必死にさがす主人公が、私、お父さんに思えて、時々、泣きそうになって…。でも先生、ほんとうは私も、お母さんの思い出を忘れたくなくて、どこかでひそかにお母さんの思い出をさがしていたことに気づきました。先生、私こうやって、毎日きっちり三つ編みしてるの、お母さんが、小さいとき、私にずっとやってくれてたからかも…」。

学生のきっちり編んだ三つ編みの向こうに、明子さんの姿が、物語が重なって胸がいっぱいになった。何気なく過ごす日々の中にたくさんの物語があることを、その日私は語り始めた。

### かっぱえびせん

「先生」。授業中、いきなり一人の手が挙がった。「先生は、教師にとって一番大切なのは、何だと思いますか?」。それは「教師になること」というワークの中での出来事だった。「一生懸命聴くことだと思います」。そう応える私の頭には、小さなカズくんの顔が浮かんでいた。

あれは大学二年の秋、金木犀が香っているところだった。大切な友をなくした私は、言葉をなくしてしまっていた。彼女との記憶を嚴重に封印しているうちに、思いを言葉にすることができなくなっていた。ちょうどそのころだった。先輩から卒論の手伝いをしてくれと声がかかったのは。

「幼児の描いた家族絵と語りから、家族関係を分析する」というテーマの研究で、先輩のアシスタントをする私たちのミッションは、子供に絵を描いてもらい、話を聞くこと。私が担当したのは四歳のカズくんだった。「これが、お母さんで、お姉ちゃんって…」と、周りの子供たちは、友人た

---

ちの指示に従いどんどん描き始める。ところがカズくんは、クレヨンも出さない。「おいは、こげんことすかん。絵なんか、かきとうなか」。そう言って、足でガンガン私をキックする。先輩から送られる鋭い視線に耐えきれず私はこう言った。「あのねカズくん、お姉ちゃんね、カズくんのお家のこと教えてほしいと。お家におるとき、カズくん、どげんことしとっとかいなって知りたいと。絵かいてくれたら、あとでなんでも好きなことして遊んであげるけん」「仮面ライダーごっこことかできるの?」「うん」「ならえよ。俺が仮面ライダー、姉ちゃんがショッカー」。そう言って、カズくんはいきなり、肌色のクレパスをとりあげ、棒をたくさん描き始めた。「これ何?」「かっぱえびせんたい」「かっぱえびせん?」「かっぱえびせん、知らんとや? おいもノリくん(弟)も、かっぱえびせん、すいとったいね。ねえちゃんもすいと?」「うん」「おいとノリくんは、毎日かっぱえびせん食べて、母ちゃん帰るのまっとうと。ねえちゃん、夜はね、かっぱえびせんがひびくとよ」。夜はかっぱえびせんが響く…。ひっそりとした部屋の中で、母の帰りを待つ二人を思い、私は胸がつまった。「ねえちゃん、なんで泣くと? 大人が泣いたらおかしかよ。母ちゃんがいつも言いよう」。そう言いながらカズくんは、お母さんの絵を真ん中に大きく描いた。お母さんは口を大きく開けて笑っている。「母ちゃんね、カズくんやノリくんがいてくれてうれしかって、いつも言うと。おいね、母ちゃんがわろうと顔が好きな」。素直でまっすぐな言葉が、私の胸の中にドーンと響いて、ますます涙があふれた。

私はそれから時々この保育園に遊びにいった。仮面ライダーごっこ、泥饅頭、散歩、ねこどん…。言葉は、人のカラダのどこかに眠っているのではない。言葉は、目の前にいる誰かとの関わりの中で、少しずつ生まれてくるものなのだ。そうカズくんは私に教えてくれた。

### 声が、言葉が響くとき、そこに物語が生まれる

私の語る「小さな物語」に耳を傾けてくれた学生たちが、今度は小さな声で語り始める。

「私の忘れられないこと、あれは高二のときです。部活動で人間関係がぐちゃぐちゃになり、キャプテンなのにテ

ニス部に行けなくなり、放課後、教室で座っていました。そのとき、担任の先生が入ってきて黙って私の横に座りました。なんにも言わないでずっと座っていてくれました。心がふっと軽くなった私は、「あのね先生…」ってしゃべり始めていました。泣きながら話す私のそばで、先生は黙って聞いてくれました」。

「高一の夏、私は突然母を亡くしました。同情されるのが嫌で、私は学校に行ったとき、普段通り平気な顔をして過ごしていました。友達も何も聞かず普通に接してくれました。みんなが帰った放課後に、ぼんやり外を見てたら、「つらかったね」と先生の声が後ろから聞こえました。急にお母さんの顔が浮かびました。いってらっしゃいって、手を振ってくれたお母さん、試合がんばらって、ハイタッチしてくれたお母さん、最後に私の手を握り、ごめんねって言ったお母さん。胸がいっぱいになって「お母さん…お母さん…お母さん……」と私は泣きながらくり返しました。私の涙が止まるまで、先生は何も言わず私の背中をなでてくれました」。

生徒の、学生の言葉に耳をすます、その関わりの中から、初めて言葉は生まれてくるのだった。そのために教師に必要なのは、身体も心もひらいた、やわらかな「からだ」である。その教師の姿勢に呼応して初めて、生徒の「からだ」もひらき始めるのだと、私はそんなことを学生に語り始めた。

学校という空間の中で、「今—ここ」に生きる生徒・学生たちが、流れる時間の中で「わたし」について考え始めるとき、それは様々な「語り」となって現れた。そして、その「語り」は、それを受け止めてくれる他者の存在をせつないまでに希求する、他者への呼びかけの声でもあった。

### 私の苦い物語

それは、「わかる」という言葉について、私が深く考え始める出来事だった。

十五年前、農業高校の教師をしていたころのことだ。授業中、ずっと下を向いているユウの姿が気になった。荒れる教室で、ユウの笑顔が私の心の支えだったから。授業が終わり、顔をあげたユウに驚いた。腫れあがった顔、切れた唇。母親に殴られたという。重度のアルコール依存症で

---

肝臓の病気が悪化した彼女の母は、精神をうまくコントロールできず、昨夜は殴る蹴るが続いたのだと。「先生、母さんが悪いんじゃない。病気のせいなんよ」「何かできることある？」と聞く私にユウは言った。「先生、ユウの母さんの友達になって。一人でも友達がおったら、母さん悩みを抱え込まないから」。

家の場所を聞き、授業の空き時間、私はさっそくユウの家の周りをうろついた。庭にいたユウの母親が私に気づき、「あらっ、先生。どうされたんですか？」「あらあ、ここ岡さんのお家だったんですね。ちょっと近くに家庭訪問に来て」「まあ、先生は大変。暑いけえ、ちょっと上がって冷たいものでも」。誘われて、家に上がった私は、ユウがどんなに優しく働いているか、豚舎や牛舎での様子を話し始めた。「私はダメな親やけん、ユウには小さいときから、辛い目にばかりあわせて」と、幼少期から始まる壮絶な人生の物語を語ってくださった。次の日、ユウが飛ぶようにやってきた。「先生、ありがとう。母さん、ものすごく喜んどう。今度いつ先生に会えるかねって」。それから、二週間に一度のペースで、私はユウの母を訪ねた。

農業祭の準備に奔走し、しばらく間が空いた、十一月の氷雨の日だった。「先生」。悲鳴のような声をあげて、誰かが走りこんできた。ユウだった。裸足だった。顔からは血が流れていた。「母さんが暴れだして、一緒に死のうって…。ユウも弟も逃げたけど、母さん死んだらどうしよう」。泣きじゃくるユウを乗せ、私は車を走らせた。弟も一緒にと言うので小学校に向かい、躊躇する担任も一緒に家に向かう。玄関のベルを鳴らしても返事はない。カーテンが閉まり、ドアには鍵がかかっていた。「どこか入れるところない？」「トイレの窓」と言った弟を肩車し、トイレの窓から入らせ、玄関のカギを開けさせた。「おかあさん、布団の中におった」。弟の言葉を聞き安心したのか、あっという間に弟を連れ、小学校の担任の先生はいなくなった。ユウと二人で玄関から入った。「母さん、母さん」とユウが必死に揺さぶる。「岡さん、岡さん」。私も必死に身体を揺すった。そのときだった。ぱっと目を開けたお母さんが、すごい形相で殴りかかってきたのは。「おまえ、何しにきたんか。おまえに何がわかる。わかるなんて言うな」「や

めて、やめて」。ユウが悲鳴をあげ、「先生、逃げよう」と私を引きずるように家を飛び出した。「先生、ごめんね」。泣きじゃくるユウと氷雨の中をとぼとぼ歩いた。殴られたのも、蹴られたのも、痛くはなかった。「わかるなんて言うな」。その言葉が私の心をグサグサと突き刺した。自分の未熟さが情けなかった。ユウのお母さんの友達になりたかった。気持ちをほんの少しでもわかりたかった。落ち込む私にユウが言った。「先生、ユウうれしかった。先生はユウのために必死になってくれた。今日のこと一生忘れないよ」。私は号泣した。その日学校では緊急ミーティングが行われ、いろいろな人の力でユウは無事に卒業ができた。あれ以来、お母さんと言葉を交わすことはなかった。

ユウが卒業し二年経ったころ、買い物をしていると「先生～」という懐かしい声が聞こえる。振り向くとユウだった。そばに、お母さんが赤ちゃんを抱いて立っていた。「先生、見て、ユウの子供かわいいじゃろ。私うれしくて。先生にはよう見せたかった。よかったあ先生に会えて」。お母さんの底抜けの笑顔に涙がこみあげた。うれしくて言葉が出なかった。それが、ユウのお母さんを見た最後の日だった。それから二週間後、蛍飛び交う木屋川に車が飛び込み、運転手即死のニュースが流れた。そこには、ユウのお母さんの名前があった。しばらくしてユウから連絡があった。「先生、母さんね、先生のことが好きじゃったんよ。それを先生にどうしても伝えたかった…」。

ある日、こんな一文に出会った。「わかる」は「わかる」と同根。物や事を他の物から切り離し、幾つかに分割し理解すること。私は、はっとした。「わかる」という言葉は、他者を自身と切り離し、対象化することを前提としていた。「わかる」と言うたびに、少しずつ遠ざかる私の気持ちを、ユウのお母さんは感じていたのだ。蛍、あのかそけき瞬きに出会うたび、私の心は疼き始める。

今、ここで、私ができること。それは「小さな声」にじっと耳をすますこと。そして、深い沈黙から立ち現れる「小さな物語」を待ち続けること。「小さな物語」を語るといふ僥倖が、私に大切なことを思い出させてくれたのだ。

(あおき さちこ 総合教育センター)